

尻取り絵本『まます すきです すてきです』(文:谷川俊太郎/絵:タイガー立石)は、「たぬき きつね ねこ」に始まり「まます すきです すてきです」で奇妙な物語が終わりますが、最後に「すぶた」を入れると「たぬき」と続き、また物語は始まります。「ママ」に永遠のいのち、万歳を捧げる言祝ぎなのです。始めと終わりが一つとなる回文「なかきよのとおのねふりのみなめさめ なみのりふねのおとのよきかな」は、年の初めの言祝ぎでした。また文字が集まって語ができます。例えばGとOとDで「GOD(神)」となりますが、逆言葉として逆に読めば「DOG(犬)」です。ニーチェが「神は死んだ」と宣言して始まった20世紀初頭の傑作は、アイルランドの作家J・ジョイスの『ユリシーズ』でしたが、この長編小説のなかで主人公につきまとう「犬」のなかに「神」の残滓を見たのは、日本のある英文学者の慧眼でした。さて20世紀チェコの作家K・チャペックの戯曲『ロボット』(岩波文庫)は、このような文字と言葉の一種のプラズマ状態が背景にあります。

ユダヤ文化からドイツ文学に移入された「ゴーレム伝説」と旧約聖書「創世記」をもとにこの戯曲は作られています。創世記は神による人間の創造、ゴーレム伝説は人間による人造人間の創造を描きます。神は粘土で形をつくり、いのちの息吹を吹き込み人間を創造します。人間は神を讃える御名「エメス(AMT)」を土塊の額に書き込むことで、人造人間ゴーレムをつくりますが、ゴーレムが制御不能となったとき、「AMT」から最初の1文字「A」を削除して「メス(MT)」すなわち「死す」という語に変換することで、いのちあるものを土に戻します。20世紀初頭に「ROBOT(ロボット)」という語を造語して世界中に広めたのはこの戯曲で、チェコ語の「ROBOTA(労働)」から最後の文字「A」を削除した語が「ROBOT」です。人間を労働の苦役から解放するために製造されたロボットたちは、やがて反乱を起こして人類を殲滅しますが、同時にロボットに「いのちの息吹」を吹き込む物質の製法も失われ、ロボットたちも死に絶えるのですが、愛を育んだ男女2体のロボットだけは生き残り、「エデンの東」に放擲されます。神による人間への呪いの土地、すなわち労働の地です。創世記のなかでのアダムとイブの営み、愛と労働と生殖の営みが、戯曲の結末で始まろうとします。2体のロボットは文字「A」を書き込まれて「ROBOTA」になったのです。文字「A」は、ユダヤ神秘思想では、アダムに吹き込まれた神の「いのちの息吹」とされている文字でした。



アルファベット第1文字「A」(言語学者J.グリムは、有名なドイツ語辞典の「A」の項目を「A、最も高貴かつ根源的な音声」という一節で始めている字形ではなく「音声」こそはかの「息吹」の変形である